

令和 4 年 6 月 2 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00642

研究課題名（和文）構文とコミュニケーション行動に関するコーパス横断的研究

研究課題名（英文）Cross-corpus analysis of syntax and communicative behavior

研究代表者

澤田 浩子（Sawada, Hiroko）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：70379022

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語における複数の構文を取り上げ、言語コーパスを横断的に分析することで、構文とコミュニケーション行動との関係を解明することを目的とする基礎的研究である。2019年度は動詞句に関わる形式として「助言のモダリティ形式」、2020年度は名詞句に関する形式として「主題提示の助詞・複合助詞」、2021年度は文構造に関わる形式として「文末名詞文」を分析した。日本語学において、構文と発話機能の結び付きに関する研究は豊富な蓄積があるが、それを複数の言語コーパスの中で検証し直すことで、特定のジャンルや場面で実現されたコミュニケーション行動に結び付けて記述することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語教育において、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）やOPI（Oral Proficiency Interview）テストなど、行動主義に基づく言語能力の育成と測定が主流となりつつある。書き言葉にせよ話し言葉にせよ、母語話者の持つ普遍的な言語能力と、社会の中で実践しつつ形成されていく言語運用能力の両面を明らかにしていくことは、今後の言語研究において重要である。本研究課題は、すでに豊富にある日本語コーパスを有効活用し、コミュニケーション場面に根ざした研究を行うことで、構文と発話機能に関する言語運用能力の解明に寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：This basic research aims to elucidate the relationship between syntax and communicative behavior by analyzing Japanese syntax across multiple corpora. I analyzed "modality forms of advice" as forms related to verb phrases in 2019, "particles and compound particles of subject presentation" as forms related to noun phrases in 2020, and "sentence-final noun sentences" as forms related to sentence structure in 2021. In Japanese linguistics, there is a wealth of accumulated research on the connection between syntax and speech functions. By reexamining them in multiple corpora, this study was able to make descriptions linked to communicative behaviors that occur in specific genres and situations.

研究分野：日本語の談話分析

キーワード：コーパス ジャンル 場面 発話機能 構文

1. 研究開始当初の背景

書き言葉・話し言葉ともに大規模コーパスが整備され、検索の利便性も上がり普及が進んでいる。また、多くの個人研究者によって、場面や目的を特化した大小さまざまなコーパスが構築されている。しかし、その一方で、それらのコーパスが持つジャンルや場面の特性はなかなか整理されず、コーパス間での特性の差異と、そこに含まれる言語データとの関連も明らかになっていない。そのため、コーパスを利用した構文研究は多数あるものの、各自が保有するコーパス内での調査に留まり、その分析結果がどの程度、普遍性のあるものか検証が進まないでいる。そのような学術的背景の中で、コーパスが含む言語データのコミュニケーション上の特性を整理し、コーパス間での比較研究を行うことは、きわめて重要な課題であると言える。

また、構文と発話機能の結び付きをコミュニケーション行動の観点で捉え直すことは、言語教育への貢献にも直結する。CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)における Can-do statements や OPI(オーラル・プロフィシエンシー・インタビュー)テストなどの普及に伴い、プロフィシエンシー(言語活動における遂行能力の熟達度)に基づくシラバス作りや教材開発が進められている。日常の生活場面に即したコミュニケーション行動と結び付けて構文の機能を記述することは、隣接する研究分野からの大きな要請がある。

2. 研究の目的

本研究は、複数の言語コーパスを横断的に活用することで、日本語における構文と発話機能の結び付きをコミュニケーション行動の観点で捉え直すことを目的とする。すでに開発されている複数の言語コーパスを活用し、ジャンルや場面の特性を視野に入れ、構文の発話機能をコミュニケーション行動と結び付けて記述することで、プロフィシエンシーを重視する現在の言語教育に最適化した形で知見を提供することを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、具体的に以下の2つの方法で行った。

・既存の言語コーパスの整理：既存の複数の言語コーパスについて、書き言葉コーパスについてはジャンル、話し言葉コーパスについては場面に関する特性を、いずれもコミュニケーション行動の観点から整理する。

・構文と発話機能の分析の発展：従来の日本語学の研究において、類似する発話機能としてまとめられている構文を取り上げ、共起する語彙や文法形式をコーパス調査し、どのようなコミュニケーション行動と結び付くのか提示する。

なお、一般に「構文」と呼ばれるものには、以下のような複数のレベルがある。それぞれ言語学的なレベルは異なるが、言語教育ではいずれも「構文」としてひとくくりに捉えられることが多い。

- ・「モダリティ形式」など、動詞句のレベルに関わる構文
- ・「助詞・複合助詞」など、名詞句のレベルに関わる構文
- ・「複文・焦点化構造」など、文構造のレベルに関わる構文

本研究では、異なるコーパスを横断的に分析する際の課題を洗い出し、次にさらに大規模な構文分析に進む準備とする。本研究ではその構想の基礎研究として、上記3種類の構文について、コーパス間での比較分析を行う。

4. 研究成果

「モダリティ形式」「助詞・複合助詞」「複文・焦点化構造」の各カテゴリから、具体的な形式を選定し分析を行った。

- (1) モダリティ形式：ケーススタディとして「助言」のモダリティ形式を分析を行った。一般に「助言」の発話機能を持つ構文として「V-たらしい」「V-ればいい」「V-たほうがいい」などの形式が挙げられる。例えば、「旅行のアドバイスをする」というタスク会話で、「今度、北京に行くんだけど何を持っていったらいい?」「あ、マスクは絶対持って行った方がいいよ」のような発話ペアを分析すると、「助言を求める側」の発話には「V-たらしい/V-ればいい」のみが出現したのに対し、「助言を与える側」の発話には「V-たほうがいい」のみが出現した。同じ「助言」の発話機能でも、助言を求める行動と与える行動とでは、それぞれ異なるモダリティ形式と結びついていることが分かった。
- (2) 助詞・複合助詞：「Nとは/Nって」などの「話題提示」を表す複合辞形式、「Nについて/Nに関して」などの「対象限定」を表す複合辞形式を分析した。特に「話題提示」を表す形式はジャンルによって共起する表現が大きく異なる。「Nとは」は平叙文と共起することが多かったのに対し、「Nって」は疑問文と多く共起し、特に「～する人っていますか?」「～する時って～ですよ」のように聞き手に情報を求めたり、共感を求めたりする文脈が多いことが明らかになった。つまり、実際のコミュニケーション場面において、「Nって」は「話題提示」をした上でさらに「相手と情報を共有し共感を求める」行動と結び付きやすいことを意味し、この用法においては「Nとは」に置き換えることができない。
- (3) 複文・焦点化構造：本研究では「思考・判断」等を表す文末名詞文を分析した。同じ名詞であっても、特定のジャンルにおいて文末名詞文で用いられる頻度が高いものがある。例えば、「考え」という語は、BCCWJ 全体では、総出現数のうち 6.8%の割合で文末名詞文の形で出現するが、新聞 においては 27.8%の割合で文末名詞文の形で出現する。同様に「方針」「覚悟」「意向」の 3 語が新聞 で、「予感」が知恵袋 において、特に高い割合で文末名詞文として使用されている。「考え」や「方針」という語自体はどのジャンルにもおよそ均等に出現することを考えると、「考え」や「方針」が文末名詞文として新聞 で多用されるのは、あくまで「～する考えだ」「～する方針だ」というコロケーションにおいて見られる偏向性であると考えられる。また、述部形式に着目し、「ダ形」「デス形」「φ(省略形)」の 3 形式との接続の割合を見ると、「感じ」「予定」「感想」「考え方」の 4 語は「デス形」との接続が多く、「感触」「印象」「予感」の 3 語は「φ(省略形)」で特徴的に多い。知恵袋 のような比較的、口語表現を反映したテキストや、新聞 雑誌 書籍 に含まれるインタビュー記事などで、発話の直接引用のテキストがあることなどを考えると、デス形、省略形の割合が高いことが話し言葉らしさを反映していると考えられる。なお、「つもり」「感じ」「予定」の上位 3 語は、新聞 知恵袋 どちらのジャンルでも高い割合で文末名詞文として使用されており、これらは特にジャンルの偏向性を持たないことが明らかになった。

いずれの分析結果からも、それぞれの構文形式において、単に「助言」「話題提示・対象限定」「(思考・判断の)文末名詞文」という発話機能の記述だけでは不十分であり、実際の場面に即したコミュニケーション行動と結びつけて分析していく重要性を示唆している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Takemoto Satomi; Seika Niiyama; Sawada Hiroko	4. 巻 1
2. 論文標題 Usage of the Japanese Demonstrative ANO in Art Writing	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Virtual Language and Communication Postgraduate International Seminar Proceedings	6. 最初と最後の頁 127-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko SAWADA	4. 巻 9
2. 論文標題 Classification of Noun-Concluding Sentences from a Syntactic Analysis Perspective	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Inter Faculty	6. 最初と最後の頁 61-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15068/00158685	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Takemoto Satomi; Seika Niiyama; Sawada Hiroko
2. 発表標題 Usage of the Japanese Demonstrative ANO in Art Writing
3. 学会等名 The Virtual Language and Communication Postgraduate International Seminar（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中俣 尚己; 太田 陽子; 加藤 恵梨; 澤田 浩子; 清水 由貴子; 森篤嗣
2. 発表標題 「日本語話題別会話コーパス:J-TOCC」の構築
3. 学会等名 NINJAL国際シンポジウム「第11回 日本語実用言語学国際会議」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hiroko SAWADA
2. 発表標題 Language Proficiency Studies and Japanese Corpora
3. 学会等名 1st UTM-TSUKUBA Joint Symposium "Exploring New Frontiers in Social Sciences and Humanities" (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------